

# 遺愛卒業生の活躍

2025年1月14日（火）

白鳳章に小泉さん、安井さん 青麒麟章は山本さん 文団協

© 2024年10月24日 21時00分

函館市



小泉浩子さん



函館市文化団体協議会（文団協、鈴木大有会長）は24日、今年度の白鳳章について函館邦楽舞踊協会の小泉浩子さん（57）＝芸名・若柳吉和浩（きちかずひろ）＝と、赤光社美術協会の安井孝さん（83）の2個人、青麒麟（せいき）章は函館音楽協会の山本和生（かずい）さん（47）の1個人が受賞したと発表した。表彰式は22日、函館市内のホテルで行われる。

小泉さんは故若柳吉和寿さんに師事し4歳で初舞台に立ち、12歳で名取、22歳で師範免許を取得。多くの弟子に和の心を表現する日本舞踊の真髄を伝えながら函館邦楽舞踊協会副理事長などを歴任し、ワークショップ開催など事業の推進に尽力。高齢者への健康づくりにも寄与していることや舞踊の創作など、活動の幅を一層広げている。

安井さんは約60年にわたり人物画を中心としたテーマを追求する制作活動を続け、赤光社で他の会員の制作意欲をも高めてきた。函館市に美術館建設の声が高まった時には先頭に立って署名活動を行い、デッサン画を販売し建築資金集めに奔走。今年100周年を迎えた赤光社の礎を築き、全道展においても全体の底上げに寄与した。

山本さんは函館市生まれ、東京芸術大音楽学部作曲科卒業後はハンガリーリスト音楽院で研さんを積み、精力的に作曲活動に取り組む。この1年はコンサートの企画運営や演奏で活躍。これまでに合唱団やオーケストラへ委嘱作を提供。函館青柳中学校など新設校で校歌の作曲を手掛けるほか、後進の育成も努める。

両章は1982年に創設。白鳳章は市の文化・芸術の振興に長年にわたり貢献した個人・団体に贈る。青麒麟章は1年間（2023年9月～24年8月）の文化、芸術活動で特に優れた実績を上げた個人や団体が選ばれる。白鳳章は今年で計133団体・個人、青麒麟章は計83団体・個人となった。（山崎純一）

2024年は遺愛学院創基150周年を迎えた年でした。在校生は部活動に、ボランティア活動に、進路に可能性を開くなど大活躍でした。遺愛を卒業した先輩達、大先輩達も頑張っています。ここでは、3人の先輩を紹介したいと思います。

1人目は**小泉浩子さん**（57歳）です。2024年10月24日に函館市文化団体協議会から白鳳章を受賞しました。小泉さんは故若柳吉和寿さんに師事し、4歳で初舞台に立ち、12歳で名取、22歳で師範免許を取得しました。多くの弟子に和の心を表現する日本舞踊の真髄を伝えながら函館邦楽舞踊協会副理事長などを歴任し、ワークショップ開催など事業推進に尽力。高齢者への健康作りにも寄与し、舞踊の創作などにも取り組んでいることが高く評価されました。遺愛在学中は、バドミントン部に所属していました。お嬢さんも遺愛出身です。（函館新聞：山崎純一記者の記事より）

巳年2025脱皮の年®/重症児デイサービス f u w a R i 管理者 ・ 奥村志乃さん（1977年生まれ、47歳）「子どもと親に寄り添う」

© 2025年1月12日 3時00分



「学校以外で子ども同士がつながりを持てる場にしたい」と話す奥村さん

「子どもたちが楽しそうに過ごす姿や、保護者からの『ありがとう』という言葉が励みになっている」。函館市昭和3の重症児デイサービス「f u w a R i（ふわり）」は医療的ケア児や重症心身障害児が放課後を過ごす場。立ち上げてもうすぐ2年になる。

木古内町出身。追愛女子高校卒業後、函館厚生院看護専門学校で看護師、道立衛生学院（札幌）で保健師の資格を取得。2000年に看護師として函館中央病院に入った。

病院では当時の未熟児センター、現在の小児科NICU（新生児特定集中治療室）やGCU（新生児回復室）で長く勤務し、障害を持って生まれた子どもたちに関わった。

働いて感じたのは親の負担の重さだった。「子どもを預ける先がなく、親は24時間休むことができない。親に休んでもらうため、子どもを預かる場所が道南にも必要」。そんな思いから病院を辞め、23年4月にふわりを開設した。

現在は未就学児4人、養護学校などに通う児童、生徒12人が登録。体を動かしたり、絵を描いたりする子どもたちを優しく見つめる。「これまであつという間に時間が過ぎた。スタッフと保護者に支えられてきた。感謝したい」と話す。

子どもたちと関われるのは高校卒業まで。「その後も切れ目なく支援できる場があればと考えている。数年後には生活介護のデイサービスをつくりたい」。大きな夢を描いている。（松宮一郎）

2人目は、**奥村志乃さん**（47歳）です。奥村さんは、木古内町出身で、遺愛を卒業後、厚生院看護専門学校で看護師、札幌の道立衛生学院で保健師の資格を取得し、2000年に看護師として函館中央病院に入りました。

中央病院では、当時の未熟児センター、現在の小児科NICU（新生児特定集中治療室）やGCU（新生児回復室）で、長く勤務し、障害を持って生まれた子どもたちに関わりました。

働いて感じたのは親の負担の重さでした。「子どもを預ける先がなく、親は24時間休むことができない。親に休んでもらうため、子どもを預かる場所道南にも必要」と感じ、病院をやめ、2023年4月に重症児デイサービス「f u w a R i（ふわり）」を函館市昭和3に開設しました。

現在は未就学児4人、養護学校などに通う児童、生徒12人が登録しています。

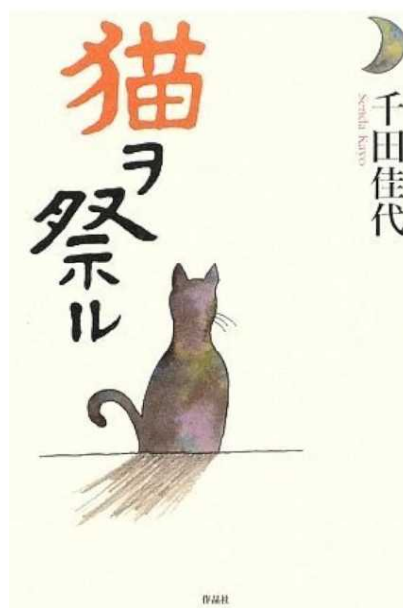
子どもたちと関われるのは高校卒業まで、「その後も切れ目なく支援できる場があればと考えており、数年後には生活

（函館新聞：松宮一郎記者の記事より）

介護のデイサービスをつくりたいです。」と大きな夢をい



94歳で書いた絵本『魔女と猫の物語』



80歳の時に小島信夫文学賞を受賞した小説『猫ヲ祭ル』



遺愛の大先輩：千田佳代さんと愛猫の「ナイル」

80歳で小島信夫文学賞をとり、**昨年94歳で絵本を書き**、出版したのが、**遺愛の大先輩の千田佳代さん**です。千田さんは1930年に東京に生まれますが、3歳の時に、子どものいない叔母夫婦の養女になり、函館で育ちました。1945年7月の函館空襲の際に、遺愛女学生だった千田さんは自宅玄関前で米軍戦闘機から機銃射撃を受け、片足が不自由になってしまいます。しかし演劇に関わりたいたいという夢を持っていて、明治大学に進学し木下順二氏のもとで演劇を学びました。卒業後は、東京の楽譜出版社に就職し、64歳まで勤めました。その間、同人誌で小説やエッセーを書いたり、俳句を読んだりもしました。姪の家のネコを引き取り、「ちいさな豹」のようなオスネコと一緒に住むようになります。「ナイル」という名前のネコです。そのナイルとのやりとりが『猫ヲ祭ル』という小説に結実し、文学賞を最高齢の80歳で受賞しました。

千田さんとは、毎年、年賀状のやり取りをしてきました。お元気かなと思っていましたら、昨年10月に94歳で絵本を出版したとの朗報が入ってきました。びっくりです。偉大な大先輩です。